

東日本大震災からおよそ7年が経過した今、テレビや新聞では東北についての報道が少なくなりました。数少ない報道の多くは、住宅や商店街が再建されたなどという明るいもので占められています。3年生でのメディアリテラシーの授業が役立ち、このように偏りのある報道に疑問を抱いていたことから、歌津応援プロジェクトへの参加を決めました。

参加するにあたり「この目で東北の今を確かめる」という目標を立てました。かなり抽象的ですが、私はこの目標を達成できたと思います。なぜなら報道をもとに想像していた東北と実際の東北は全くの別物だと気付けたからです。

初日に訪れた南三陸さんさん商店街が高台移転後にオープンした2017年3月、メディアはこれを大きく報じました。その後もメディアは「オープン半年、来場好調」と、盛況ぶりを伝えたことは記憶に新しいです。勝手な判断でこの情報を鵜呑みにしてしまいこの商店街は混雑しているとばかり思っていました。しかし現地に到着するとそこはがらんとしており、「ここが本当にテレビや新聞が取り上げた商店街なのだろうか。」と疑うほどでした。

更に、地元の方の商店街への思いにも驚かされました。寄木の方々との交流会で、「私のはあの商店街をよく思わない。見せかけの復興のようだ。」と地元の方がおっしゃいました。一方、メディアは「復興の象徴的存在」などのキャッチフレーズでアピールしていました。このことから、メディアに頼ってばかりでなく自分の目で確かめることの大切さを再確認しました。

同じく初日に見学した大川小学校でも想像と現実との差に我が目を疑いました。大川小学校に関する報道は私にとって恐ろしいものであるため、テレビに流れる映像や新聞に掲載される写真をほとんど見たことがありません。ですから、尚更現実とかけ離れたイメージが膨らんでいたのだと思います。意外にも生々しい部分は残っておらず、この場所で児童、教職員合わせて約七十名の命が奪われたと想像するのは容易ではありませんでした。

これはまさに広島市の平和記念公園を訪れたときと似た感覚でした。夜になるとライトアップが施され、併設する平和記念資料館からは生々しい資料が年々減少しています。その代わりにタイムリーかつ注目を集める展示が目立ち、観光地化を最重要視していると感じて取れました。このことから、平和記念公園から戦争の惨さを想像することは時とともに難しくなっていると感じます。

ですから生々しさが残っていない大川小学校が、平和記念公園のように「見せるためのもの」に近づく可能性があるとは私は考えます。震災遺構の保存方法は市と遺族で決定されるため一度訪れただけの私が口を挟むことはできません。しかし少しでも生々しい部分を遺すべきだと思います。そうしなければ、見る側は震災遺構の目的もわからず見学することになるでしょう。大川小学校へ向かうバスで、以前そこを訪れた団体が静かに見学することができず地元の方に注意を受けたと伺いました。これは既に見る側の意識が低下している証拠だと思います。「震災を忘れない」ことが震災遺構の目的であり「遺す」のはあくまでその手段だと心に留めておくべきです。大川小学校の見学を通じて、目的と手段を区別することの重要性を学びました。そして大川小学校がどのような形で遺されるか、今後に注目したいと思います。

歌津応援プロジェクト全体を通じて、本物に触れる経験こそが本当の勉強だと感じました。メディアが伝える南三陸さんさん商店街も、私が想像していた大川小学校も本物とかけ離れており、まさに「百聞は一見に如かず」ということわざの通りでした。目の前のことしか見えていない私は、数値化される勉強の成果ばかりにとらわれてしまいます。このプロジェクトのような有志行事での学びはテスト勉強と異なり、すぐに活かせるものではありません。しかしこの3日間で、暗記をすることや問題を解く学業以上に本物に触れることは有益だと身をもって感じることができました。この4月から5年生になり、高校卒業後の進路に向けて学業を最優先にする雰囲気がうまれると思います。むしろ、既にこの雰囲気は出来上がっているのかもしれませんが。どのような雰囲気であっても学業も大切にしつつ、本当の勉強に積極的に取り組みたいと思います。